

社会調査を通して、学生自身が社会と向き合い、 多様な社会を認識する手法を学ぶ



社会学部教授
町村敬志

専門性と総合性を兼ね備えた
カリキュラムを目指して

社会科学的研究における「社会調査」は、社会を認識するうえで不可欠の方法です。社会現象が多様である以上、調査という方法を通じた社会現象への接近もまたマルチメソッドであることが求められます。特に大きな変動期にある現代社会に解析のメスを入れようとすれば、量的調査と質的調査双方の方法をバランスよく統合し、学生に習得の機会を提供する必要がありますでしょう。

かつての社会学部のカリキュラムは、専門性を重視するあまり、学問ごとのタテ割りだけで構成されていた面があります。しかしながらこの10年ほど、冒頭の見出しにあるような思想に基づいた学部全体の取り組みによって、より総合的な学びを提供するカリキュラムへと変わってきました。専門性を深めることを大切にしなが

も、学生には領域を超えて横断的に学んでもらうために、各学問の「分野外」の共通科目にあたるものを充実させてきたのです。

先鞭をつけたのは大学院でした。大学院には《総合社会科学専攻》《地球社会研究専攻》という二つの専攻があります。前者は、比較的学問ごとのまとまりが強いものです。一方、後者は、専攻として誕生したときからより実践的な性格を持っていました。これら両者にまたがる形で、高度職業人としてのさまざまな技法を修得することを目的とする、さまざまな科目がこの間順次用意されてきました。

学部の場合も似たような取り組みが進められてきています。ニフティの寄附講義により、プログラミングを行ってインターネット上で実際に発信したり、大手新聞社との提携でメディアのリテラシーや発信方法を学んだりというように、さまざまな科目が導入されています。

そして社会調査科目の体系化・充実化、社会調査士認定科目の導入もまた、その取り組みの一環として行われてきました。

フィールドワークが学生にもたらす
「想像力」の大切さ

もともと社会学部には、学部創設当初から「社会調査

室」が設けられて

おり、社会調査に関する独自の長い伝統を築いてきました。たとえば長崎の被ばく者の調査など、調査情報やノウハウについて多くの蓄積があり、重要な財産として現在まで受け継がれています。

すでに社会調査について歴史を持つ本学において、その豊かさを失うことなく、社会調査士認定科目を導入するにはどうすればよいか。単なる「資格のための勉強」「技法のみの習得」に陥らせないために、どのように体系化すればよいか。これにはさまざまな議論がありました。資格認定科目を導入すべきではない、という意見が出たことも事実です。しかしながら、学生にどんな学びを提供するか、何を身につけてほしいかという観点から考えたとき、議論の余地は残しながらも、社会調査士認定科目の導入を決めました。

最大のポイントは、社会調査士認定のG科目にあります。本学では基本的に、ゼミでの実作業を通してフィールドワークを体験し、その延長線上にG科目の認定を受けるという制度設計を行いました。ではなぜゼミでの

社会学部

社会動態研究分野
社会文化研究分野
人間行動研究分野
人間・社会形成研究分野
総合政策研究分野
歴史社会研究分野

大学院社会学研究科

総合社会科学専攻

社会動態研究分野
社会文化研究分野
人間行動研究分野
人間・社会形成研究分野
総合政策研究分野
歴史社会研究分野

地球社会研究専攻

フィールドワークが最大のポイントになるのか。それは社会科学研究を行ううえで、データの向こうに「現場」があり、「人」がいる——という想像力を身につけることは必須であり、その想像力を身につけるためにはフィールドワークは最適なアプローチになるからです。フィールドワークとは文字どおり現場に足を運んで調査をすることですが、現実の調査はそうシンプルにはいきません。

まず課題を設定します。そしてすぐどこかに出かけていくわけではなく、事前にさまざまな資料を調べます。多くの場合、学生が設定した課題に関する資料——統計データ、インタビューなど——は、学内外を問わずすでに膨大な蓄積があります。それら関連資料を徹底的に調べるなかで、今改めて自分が調べるべきことが抽出され、調査内容や調査対象が絞られてくるわけです。

そして自ら作成した調査票やインタビュー・フォーマットをもとにフィールドワークに乗りだしますが、ここで学生は大切な洗礼を受けます。調査を行う側（学生）にとつては、調査項目を取材すること、その取材に時間を割くことは当然の行為です。しかし取材を受ける側の方々にとつては当然の行為ではありません。あるとき突然学生から連絡が入り、「調査のために話を聞かせてください」と言われても、「いきなり何なんだ？」と思うのが普通です。けんもほろろな対応を受けることもあるでしょう。それでもあきらめずに調査の目的や内容を説明し、協力してくださる方々を見つける。インタビューに臨んでは礼を尽くし、調査結果にまとめたことをしっかりフィードバックして、良好な関係を維持する。このような現場での経験を積むことがとても重要なのです。

というのも、社会調査の一連のプロセスからみると、調査自体は一過程です。調査で集めた情報を持ち帰ったら、その後コンピュータで分析をかけたたり、ゼミ内で討論を行ったりして、最終的にレポートとしてまと

めます（科目認定を受けるためにはこのレポートの提出は必須です）。そのプロセスのなかで、ともすると学生は「数字遊び」や「討論のための討論」に陥ってしまう危険がある。つまり現場から乖離してしまうわけです。こうなったらその社会調査は、社会を認識するためのものとはいえません。

有用な社会調査であるためには現場から乖離しないこと。現場から乖離しないためには、インタビューに協力して下さった方々の存在をつねに意識する以外、方法はないでしょう。データの向こうに「現場」があり、「人」がいるという想像力を身につける——とは、つまりそういうことです。

**社会調査の枠を超え、
各分野の専門家とふれ合う機会を設ける**

フィールドワークの重要性は前述のとおりですが、G科目認定としてゼミでのフィールドワークを導入するうえで、社会調査科目全体の体系化・充実化も進めました。冒頭でふれたように、量的調査と質的調査双方をバランスよく習得するために、社会調査Ⅰおよび社会調査Ⅱを再編したほか、量的調査と質的調査にかかわる科目を新設しました。

また、上述の実習科目にあたるG科目には、教育、都市計画・街づくり、歴史学など、さまざまな分野の先生方に参加していただいています。各分野の専門の方々とふれ合って、社会を多面的にとらえる力を鍛えることは、学生が社会調査を学ぶうえで大切な経験になると考えたからです。

たとえばある社会調査を行うために、歴史資料をあたえる必要が出てきたとします。自分の設定した課題について、どこに行つて何を探せば適切な資料に出合えるか。こういった場合、歴史学の専門家にアドバイスを仰ぎ、欲しい資料に行き当たることは、学外の人へのインタ

ビューと同等の価値があります。この社会調査以外の分野の専門家とふれ合えば、他の大学にはない取り組みといえるでしょう。

**社会科学研究を体系的に学ぶことが
学生にもたらす達成感**

資格認定科目であることの弊害、つまり「社会調査Ⅱ技法」のイメージを持たれてしまうのではないかと、という懸念については、いまだ議論の余地があります。しかし現段階における学生の反応は、非常にポジティブなものが多いです。なかでも印象的だったのは、「自分は社会学部で体系的に学んだという実感が持てるようになった」という感想です。やはりある種の達成感を体験できるカリキュラムになっていることは確かです。特にフィールドワークの経験が大きく寄与しているのではないのでしょうか。

もともと社会学部の学生には、社会のさまざまな人・問題との出会いを経験したいという願望があります。そしてその願望は、社会という「現場」に対する憧れと、ちよつとした恐怖となつて表れます。憧れに冷静な視点を導入し、恐怖を払しょくするためには、社会調査の方法・手続き・知識を身につけてフィールド体験をすることが、一番なのです。相手に受け入れられたり、断られたりしながら、自分にとって必要な情報を手に入れ、一つの形にまとめ上げ、また相手に還元する。このような体験を積んだことが、学生一人ひとりの達成感につながっているのでしょう。

社会調査は社会科学研究にとって不可欠な手法です。同時に、学生自身が社会と直接向き合う、大切な体験の場でもあります。資格認定科目である・なしにかかわらず、その意義や重要性は今後も変わりません。社会学部はその大切な場を提供し続ける学部でありたいと考えています。（談）